
コクトーの耳

向山 葉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コクトーの耳

【Nコード】

N4850W

【作者名】

向山 葉子

【あらすじ】

夜の中で時を刻む時計の音に、かすかな音が混じっている。耳鳴りだということには分かっている。……

【初出】月刊「武州路」平成元年六月号（通巻一九〇号）

【再録】ウェブサイト「西向の山」平成十五年五月

コクトーの耳

向山 葉子

夜の中で時を刻む時計の音に、かすかな音が混じっている。耳鳴りだということには分かっている。昼間、雑事に追われている時にはほとんど気にもとめない程度のものだ。だがだいたい長く続くので、医者にも出掛けてみたのだが何処にも異常はないとの診断である。

……じつと目を瞑っていると、まるで自分が貝になったような気がする。身体の下で砂がさらさらと流されていく。私は透き通った波に揉まれてころころとあてもなく転がっていくのだった。そして眠りへの緩やかな坂を転がり落ち始めた。がそれは、突然鳴り出した電話のベルにたちまち破られてしまった。

『もしもし、“指”ですけど』

電話の向こうで男が笑いを含んだ声で言った。すぐには何のことだか分からなかった。

『忘れた？ 指だよ、指。佐藤だよ』

そう言われて、私はすっかり忘れていた昔のことを思い出した。

『うん、今ね、“鼻”と“耳”も一緒。久し振りに会って飲んでるとい』

彼らと会わなくなってから、もう何年たっただろう。あの頃の私は彼らに囲まれて華のような日々を送っていたのだ。まるで王女のようにちやほやされて。

『でさ、マドンナはどうしてるんだろうつてことになってね。いやー懐かしいなあ。謝恩会以来だもんね』

そうだ、あの学生最後の日、私は彼らに私の一部分を分け与えた

のだ。薄いピンクのドレスを着て、微笑みながら。謝恩会のカクテルに酔った私は、ボーイフレンドのひとりひとりに花を一輪づつ渡しながら、ある者には目を、そしてある者には指をあげると約束したのだ。他愛のない子供らしい約束。今の今まで思い出しもしなかった約束を。

『みんな君に夢中だったからね。特に君の白くて形のいい耳をみんなが欲しがってたっけ。コクトーの耳ってあだ名してたんだよ。綺麗な波に洗われる貝殻みたいだったから』

そんなこともあったような気がする。今では誰もそんなことを言う者もなくなり、すっかり忘却の彼方である。

『もう教えてくれてもいいだろ。一番大切な耳をあげたのは誰なのか』

誰だったっけ……と私は思いを巡らしてみた。たぶん、堀口さんだろっと思っ。

『え？ 堀口？ 違うよ。やつは目だったじゃない。がっかりしてたんだぜ、堀口』

ああ、と私は声を上げてしまった。そうだった、堀口さんにはあげなかったのだ。他の女の子とダンスをしたのが癢に触って、彼が一番嫌いな目をあげる、と言い放つたではなかったか。一体誰にあげると言ったのだったか、あまりに軽くそのへんにいた人にあげてしまったために思い出せない。

『堀口も今じゃ親父だよ。他の連中も結婚したり、家を建てたり、すっかり人生歩んでるよ。村上以外はね。やつは可愛そうだったね。……え？ 知らなかった？ 村上の一件。やつさあ、卒業してから田舎帰ってさ。家業を継いだんだ。ほら、あいつの家網元だっただろ。それで慣れないながら漁師稼業始めたってわけだ。でも、にわか仕立てだったからね、時化にあつてさ、船がらぽーんと荒海へ落っこちちまっってお陀仏だった。頑丈そうなやつだったけど、あつけないもんだよ』

村上……あまり鮮やかな記憶はない。背のあまり高くない、四角

い顔の青年だった。いつもみんなの後ろでにこにこしているだけの目立たない人だった。謝恩会の日もそうだった。時々目が合うと照れたようにすぐに視線を外してしまう。

『君、村上には何をあげたの？』

そう言われても思いつかない。……あの時、村上さんは清潔な白い歯を見せて笑っていた。極上の朗らかな笑顔。ありがとう、と言った明るい声、僕一生忘れません、と言った弾んだ声。彼のあんな表情を見たのは初めて最後だった。……一体、何をあげたのだったろう？ 耳鳴りがだんだん大きくなってきた。まるで時化の海のよう。

『あ、思い出した。耳だよ、耳。どうしてあいつにやるんだろうって俺、不思議に思ったんだから』

そう言われても思いつけはしなかった。だが、この耳鳴り、これは海のものだ。……たぶん私は村上さんに耳をあげたのだ。戯れに心もなく、思いつけない程軽く。耳鳴りが一際大きくなったように思った。電話の声も遠くなっていった。代わりに轟く怒濤の音が一面を支配した。彼は私の耳を持ったまま海に沈んだのだ。私の耳は貝の殻。彼と一緒に海に沈んだ。……私はこのまま、海の響きを聞き続けなければならぬかもしれない。死の国にいる彼の、優しい復讐を受けて。

(了)

(後書き)

掌篇小说『コクトーの耳』 向山葉子

【初出】月刊「武州路」平成元年六月号(通卷一九〇号)

【再録】ウェブサイト「西向の山」平成十五年五月

(C) 1989 Mukouyama Yoko

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4850w/>

コクトーの耳

2011年9月6日21時00分発行